

第32回泌尿器科漢方研究会学術集会

代表幹事:堀江重郎(順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学)

日時:2015年6月20日(土) 13:00~18:05

会場:コクヨホール(東京都)

当院における補中益気湯の 使用状況に関する検討

帝京大学医学部附属病院 泌尿器科学¹⁾

順天堂大学大学院医学研究科 泌尿器外科学²⁾

○木村 将貴¹⁾、斎藤 恵介¹⁾、磯谷 周治¹⁾、久末 伸一²⁾
井手 久満¹⁾、武藤 智¹⁾、辻村 晃²⁾、山口 雷蔵¹⁾
堀江 重郎²⁾

【目的】補中益気湯は病後や術後の全身状態の改善に使用するとともに、癌化学療法や放射線療法時の副作用軽減、慢性疲労改善、男性更年期障害、勃起障害、男性不妊症にも使用される泌尿器科領域において欠くことのできない漢方の一つである。今回、帝京大学医学部附属病院で1年間に処方された補中益気湯の使用状況について検討したので報告する。

【方法】2014年1月から2014年12月の1年間に帝京大学医学部附属病院泌尿器科外来にて補中益気湯を処方された171例をチャートレビューによって分析、検討した。

【結果】平均年齢は60.5±14.0歳であった。男女比は男性161例(94.2%)、女性10例(5.8%)であった。投与疾患別で検討したところ、LOH症候群69例(40.4%)、前立腺肥大症31例(18.1%)、勃起障害31例(18.1%)、前立腺癌14例(8.2%)、尿路感染症8例(4.7%)、男性不妊症5例(2.9%)、腎癌3例(1.8%)、膀胱癌3例(1.8%)、その他7例(4.1%)であった。併用使用薬剤を検討したところ、なしが最も多く36例(21.1%)、PDE5阻害薬30例(17.5%)、テストステロン28例(16.4%)、 α ブロッカー27例(15.8%)、漢方8例(4.7%)、排尿関連が10例(5.8%)、その他が21例(12.3%)であった。

【考察】帝京大学における補中益気湯の使用状況について検討した。男女別にみると9割強と圧倒的に男性に対する処方が多かった。また対象となる疾患をみると、全体の処方の約4割が全身倦怠感、慢性疲労感、体力の衰えなどの訴えに代表される男性更年期に対する身体・精神症状に対して投与されていた。それに続いて、前立腺肥大症と勃起障害に対してそれぞれ2割弱処方されていた。また併用使用薬剤はなしが最も多く、単剤での効果を期待する処方が2割に認められ、それ以外ではPDE5阻害薬・ α ブロッカー・テストステロン補充が多かった。総じて、当院ではメンズヘルスという観点からの補中益気湯の利用が多く認められ、名前の由来である体力を補い元気をつけるという役割を期待しての処方と考えられた。